

「〇」(わ) 創刊1992年号

平成4年(1992年)11月創刊

平成5年(1993年)11月発刊

年1回発刊予定 通刊第2号



編集人: 編集長 伊藤文憲
副編集長 丸山潤一郎
河村あづさ 国岡あかね
井口典子

発行: 武蔵大学剣友会

武蔵大学剣道部創生期特集 第一回 長谷川 勲 先輩

(昭和三十七年卒)

去る五月一日、国立に関根日吉先生をおたずねし、武蔵大学剣道部創生期における長谷川先輩にまつわるお話を伺いました。

長谷川先輩は、武蔵大学剣道部の第一期部員でいらっしやいます。卒業されてからも稽古に試合にと度々足を運んでおられ、現在でもOB会会長として剣友会の活動にも尽力いただいております。

■関根先生は、長谷川先輩には剣道部の出来た当初から剣道を教えておられたのですか。
「最初は同好会みたいな部だった。直接は教えていなかったけれど、昭和三十七年ころから私は、武蔵の道場にいくようになったんだ。だから長谷川君が現役の頃は、稽古をしたことはなかったんだ。でも卒業してからも彼は毎日道場に来てたね。大袈裟にいうわけじゃない、会社に勤めているはずなのに、毎日ちゃんと道場にきてたものだから内心びっくりしていたものだ」

■長谷川先輩はどのように部に貢献をなさってらっしゃったのでしょうか。
「私が一、二年師範を務めてから入ってきたのが嶺岸や緑川の代だった。稽古ではカンガ

ンってずいぶん厳しくしたものだ。そうするとその厳しさの傍らで、女房役が必要なんだ。長谷川君は、それだったね」

■例えはどのようなことがありますか。
「四天で初優勝した時のキャプテンは、嶺岸だったんだが、割りとおとなしくてもっと奮発させなきゃならんと思っただね。私が後輩たちのいる前で、わざとレギュラーから外そうとするから、長谷川君に、それに対して反対するようにしてくれとたのんだことがある。実際にそうしたんだが、たまさか優勝したよ」

■部の運営方針で対立したことはありますか。
「いや、ないよ。とにかく私なんかよりもずっと部に出てたからね。一番の剣道部の功労者は彼だと思ってるよ。十年以上来てたんじやないかね、道場に。仕事はどうしてたかは知らんが、いや、でもあまり褒めるとのぼせるから本人には言わないんだけどね(笑)」

■関根先生曰く「激賞したと書いていいよ」とまで言わしめた長谷川先輩。創生期あつてこそ今の剣道部です。ありがとございませう。

達人インタビュー

剣友会では一人目の七段取得者となられた真谷先輩に去る二月六日に行われた昇段祝賀会の席でお話を伺いました。

真谷先輩の剣道歴を教えてください。

真谷(以下M)、小学校四年からかな。水戸東武館という所に稽古に行っていました。水戸藩の剣道指南、千葉周作ゆかりの道場で当時も剣道が盛んでした。「武者怒」が道場についていて、小さい頃そこから稽古をしている様子をよく見ていましたね。

五段以降の取得はいつですか。

M 五段は昭和四八年(二六歳)。六段は昭和五九年頃。居合の五段は六十年に取りました。

七段への道程はどのようなものでしょうか。
M 六回目の正直で、仙台にて昨年取得しました。三年かかったわけですね。土屋先輩とどっちが先かという話もしてんですけど、先輩の気遣い、剣道への取り組み方をみていると、あ、かなわないな、先輩が先だん分かっています。

大学時代のお話になりますが、関根先生と



の思い出は？
 M もう顔をみるだけで言が痛みましたよ。
 今後の目標は？
 M 今持っている生徒たちに一生懸命剣道を教えて、生徒たちが私の剣道をやってきたんだという証になるようにしたい。剣道の跡継ぎというか誰に教わったんですかと聞かれたら、「真谷先生です」と答えて貰えるようになりたいですね。



強くなるために必要なものは何だとお考えですか。
 M 稽古です。稽古は正産だから自分の体についてくるとおもいます。小さな積み重ね、今ここでやるということが大切ですね。

今年四六歳の真谷先生。熱っぽく剣道を語られる先輩に、インタビュアーは圧倒されました。この日も、剣道部のために水戸の自宅の真谷武道長店から、たくさん竹刀のプレゼントを持ってきてくださいました。突然の取材に快くお答えいただきましたこと併せて心からお礼申し上げます。また、重ねて見送お祝い申し上げます。

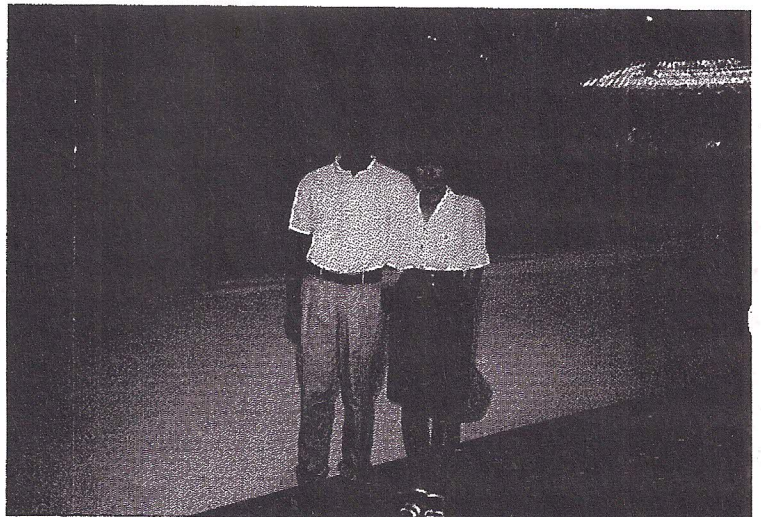
今だから言えるこのはなし

『今だから言えるこの話』

昨年平成4年10月10日のめでたい日に、長い遠距離恋愛を貫いて晴れて結ばれたお二人の剣友会会員がいらっやいます。武蔵剣道部には、代々部内恋愛、部内結婚が多いと噂されていますが、まさにそれを体現してくださったお二人、杉野茂男さん（S62年卒）と五月さん（旧姓田村/H1年卒）です。今宮崎市に居を構えていらっやるところへ、お手紙で「今だからいえる話」にお応えいただきました。

- 結婚を決めた理由は。
 茂男さん（以下M）
 外食に飽きた。
 五月さん（以下W）
 年貢の納め時か。
- 相手の一番好きな所と嫌いなところは。
 W. お互いに気を使わないで過ごせる所。
 嫌いな所は家庭円満のためあえて追求しないようにしています。
- 結婚前と結婚後の生活のギャップについて
 W. ちょっぴりぬかみそくさくなったかな。
 ネオンが恋しいですね。そう言えば二人で飲みに行くことがほとんどなくなりました。
 M. 一人の時ほど飲みにかなくなりました。少々ネオンが恋しい。
- お料理の腕前はいかが。
 W. 一人暮らしが長かったので得意ですね。

- 初めて会ったときのお互いの印象
 M. 話好きそう。おしゃべりそう。
 W. おとなしそう（全然ちがってました）
 - 初めてのデートはどこ
 WM. 二人とも田舎者のため、ディズニーランドへいったことがないということが恥ずかしくて、こっそりでかけた。
 - 学内で手をつないだことはありますか。
 キスをしたことは。
 （二人にかわって後輩のAさん）
 ふたつともイエスのはずです。
 - 遠距離恋愛を成功させたヒケツはなんでしよう
 お互いに出会いのないところに就職すること。
 - 子供は何人欲しい。
 2、3人です。放任主義でそだてる。
 - 将来のゆめは
 M. 豪邸を建てたい。
 W. 旅行ざんまいの生活をしたい。
- 大変お熱い話をありがとうございました。



《特別寄稿》

二年間の大任を終えて

伊藤文憲（昭和四十六年卒）

平成二年十月二十日に武蔵大学剣道部創部三十周年祝賀会が盛大に行われました。そして会が終り会場の銀座東武ホテルを出ようとした時、岡田先輩（昭和三十九年卒）に呼び止められたのが運のつき。先輩から来年度の剣友会執行部役員を引き受けてくれなにかという依頼に、果たして自分にできるかどうか迷いましたが、平成三年の剣友会総会で結局お引き受けることになりました。幹事長・顧問さんと副幹事長伊藤のコンビでこの二年間にわたって務めさせていただきました。

剣友会の組織は三十周年祝賀会以前は、組織らしい組織はなかったように記憶しています。それをこの会を機に岡田さんが年代幹事会という縦と横にも繋がる組織をつくられ、また剣友会規約などの整備と本格的な体制を整えられました。私たちは岡田さんが引いたレールの上をひたすら走った二年間だったような気がします。

私たちの任期中の最大のイベントは開根日吉先生が御勇退されるに際しての、その感謝の集いです。先生は、わが剣道部最大の功勞者であられ、またわれわれ初期の頃の剣道部員にとっては剣道を教えていただいた記憶以上に「人生哲学」をご伝授くださった心の恩師でもありました。平成三年十一月三日に東京北区王子の東武サロン北トピアで二三〇名をこえる先生方、剣友会および現役学生が一同に会し盛大に行われた集いでした。このよつなイベントを企画することも主催することもまったく初めてで、仕事もそつちのけで取り組んだことを懐かしみ思い出します。

嶺岸・伊藤コンビで取り組んだことが二つあります。その一つは〇B会費徴収に「預金口座自動振替方式」を導入したこと。会費の

徴収はどの大学〇B会でも頭を悩ませる問題です。わが〇B会も例にもれず、数年前は年間二十万から三十万円くらいしか集まらないうために、何かやりたくても何もできない状態であったらうと思えます。希望者を募って取り入れた方式です。現在契約していただきの方はまだ七〇名程度ですが、これで執行部としては最低限での予算が立てられるようになりまし。現在は会計の大竹さん（昭和五十六年卒）の努力もあり、次年度へ一〇〇万円近い繰越ができるまでになっています。

もう一つは、剣友会員が卒業年次の違う先輩、後輩とまた現役学生との接点をつくるための剣友会新聞の発行です。特に地方にお住まいの剣友は、先生方および現役学生と接する機会も少ないことでしょう。新聞紙上に積極的に参加していただいて、剣友会の大きな「輪（和）」を広げていけたらと願っています。この新聞を作っていくに当たっては比較的卒業年次の若い剣友が仕事の合間をぬってボランティアで携わっています。

私たちが残念ながらできなかったことがありまし。それは、年に一、二回多くの剣友諸兄が集まって気楽に意見交換をしようか、会を開くことです。これが実現すれば、きっとさらにはすばらしい剣友会になることでしょう。もう一つは地方ごとにブロックをつくっての剣友会を作ることです。距離的に近いことで、剣友が集まりやすいのではないのでしょうか。やり残したこと、心残りのことは多くありますが、二年間では少し時間的に制約もありまし。

平成五年からは幹事長に紙谷正之さん（昭和四四年卒）と副幹事長に松井邦夫さん（昭和四五年卒）のコンビで剣友会を引っ張っていくことになりました。お一人とも行動力抜群の方々ですから、すばらしい剣友会になるだろうと思っております。バトンタッチも無事終りホッとしています。最後になりましたが、

年代幹事の方々には会費納入の件などで大変ご無理を申し上げまし。そしていろいろお世話になりました。紙上をお借りしてここに御礼申し上げます。

『この人に聞く』

今回は、昭和四八年卒業の矢倉美津江さんに登場していただきます。

いまでは、五十余名もの女性〇Bを有する武蔵大学剣道部。矢倉さんは、初の女性部員でいらっしやいます。矢倉さんには、現在携わっていらっしやる仕事を中心にお話を伺いました。

Q. 矢倉さんは、剣道部には途中入部なされたといひました。そのきっかけは何だったのですか。

A. 三年生の頃、思い悩むことが重なり、武道の持つ厳肅な雰囲気の中に身を置いて自分を見つめてみたいと思ひ、遅い時期を承知で入部をお願い致しました。現在は、剣道はやっておりますが、スポーツはテニスをして「道（どう）」とつくものは子供の頃に習った書道をまた始めました。

Q. 今携わっていらっしやるお仕事の内容をお教えください。

A. 都内の写真館に勤務して、7年目になります。仕事は、暗室業務で主に、白黒プリントの焼き付けです。小さいものは運転免許証から大きいものは葬儀用写真まで。また集合写真なども担当してあります。

Q. 仕事の面白さは、どのような所ですか。

A. カラープリントにしても撮るカメラにしても、自動化、機械化の占める部分は大きいですが、こと白黒プリントに関しては、一枚一枚が手焼きです。色のある被写体を白、黒、灰色という無彩色に置き換える中で、濃度と

コントラストでどれだけ被写体のリアリティや質感を出すかに、目と手の技が要求されるのです。そこが何年やっても難しいところであり、面白いところだといひますね。

Q. ご自身にとって働くとはどういう事ですか。

A. 大部分の人にとって「生きるため」が第一義でしょうが、反面「パンのみ生きるにあらず」でもあり、パン以外の部分が大い方がゆとりある豊かな人生を送れるのではないかとおもひます。私自身は、日々の業務を消化する中で、仕事に教えられたり鍛えられたり、学ぶこと多々あります。そんな経験を榮養に技術の向上や人間性の成長を心掛けて地道に取り組んでいます。

Q. 矢倉さんが就職なさった当時、女性が働くということ、社会的にどの様にとらえられていたのでしょうか。

A. 昭和四十年代後半は、女性の就職が結婚までの腰掛け的社会勉強といった意味合いが大きかったように思ひます。現代のように働くのは当たり前、結婚しても仕事を続ける風潮に隔世の感と女性の頼もしさを感じます。

Q. 仕事に限らず、これからの目標あるいは興味を持っていらっしやることなどをお教えください。

A. 在部中から「道」という字と概念に興味を持っていました。プライベートでは、全国の名のついた「坂道」を振り歩いていきます。将来老後の宿題に自分でプリントしたいと思ひますので、ぼろぼろ白黒ネガでも撮り始めようかと考えてあります。

